

<論文>

イデオロギー論についての覚書

Rethinking Ideology: an anthropological perspective

浜本 満*

要旨

特定の社会空間において流通している信念の問題は、人類学の中心的な記述研究対象のひとつであった。この関心は社会科学におけるイデオロギー論の問題系とどのように切り結ぶことができるだろうか。この覚書は、テリー・イーグルトンのイデオロギー論を手がかりに、人類学の側からのこの問題へアプローチする新たな視角を提出することを目的としている。イデオロギーは、その起源（発生論的な問い）においてよりも、言説空間の内部でのその転送過程においてこそ問題となることを強調したい。さらに真理の対応説に代えて、W・ジェイムズのいう「真理化のプロセス」の概念を中心にすえることによって、世界に対する適応的实践に内在する信念としてイデオロギーを主題化するひとつの方途を開く。

キーワード：イデオロギー、言説空間、転送過程、真理化のプロセス、プラグマティズム

目次

- I はじめに
- II 党派的利益：意図か効果か
- III 集団の経験との固有なつながり：人々は観念を生み出すか
- IV イデオロギーの虚偽性
 - 1 虚偽性について語ることの困難
 - 2 言説空間における真偽の問題
 - 3 真理化のプロセス
 - 4 適応的信念は虚偽でありうるか
- V スケッチ：真理化のプロセスと言説空間の構造

I はじめに

テリー・イーグルトンの『イデオロギーとは何か（原題 "Ideology : an introduction"）』は、「入門書」という体裁でイデオロギー概念をめぐるさまざまな見解をほとんど網羅的に扱っていながら、議論が拡散してしまうことなく、著者自身の明確な問題意識によって

* 九州大学人間環境学研究院教授

見事に求心力を保った優れた理論書である。それはわれわれが今日イデオロギーの問題を再考するうえで格好の出発点を提供している。筆者は彼のマルクス主義的な政治的実践的関心をかかわらずしも共有はしていないが、人が特殊な信念を抱き続け、あるいはそれらに縛られ続けるのはいかにしてかという、個別の社会空間における信念の持続と再生産の問題と、そこからの離脱の可能性についてイーグルトンと同じ深い理論的関心を抱いている。一見すると誰にとっても人生をますます厄介で不愉快にしてしまうようにしか見えない妖術の観念——自分の不幸や災いの背後に自分に対する隣人の悪意を見てとる観念——がなぜある社会の人々の日々の生活実践を左右し続けているのか、今日の日本でなぜ誰もが自分がそれをもっていることを恥じるかもしれない差別意識が実際の行為選択の場面ではしばしば人々を拘束し続け、そうした観念の持続に教育がまるで効果を及ぼしていないように見えるのはなぜか。等々。イーグルトンが提出するイデオロギー論をめぐる見取り図は、こうした問題を考えるうえでも大いに参考になる視角を提供している。

この覚書は、イーグルトンの議論を解題、解説することを目的にはしていない。彼の議論を手がかりにして、筆者自身の観点を明示化することが狙いである。イーグルトンが「イデオロギー」を語る際にこだわっている三つの論点がある：（１）党派的利益（２）集団固有の意識（３）虚偽性。この３点は、従来のイデオロギー論がイデオロギーの特性として問題にしてきたもの以外のなにもものでもない。この三つの論点を相互に矛盾なく共存させることは思いのほか難しいのだが、イーグルトンのイデオロギー論はこのいずれの論点をも守り抜こうとする姿勢に貫かれているように思われる。以下の各節では、冒頭で各論点に対するイーグルトンの言及をまとめたうえで、それぞれについての筆者自身の見解を示していきたい。

II 党派的利益：意図か効果か

権力をめぐる関係の中で、特定の党派の利害関心にとって都合のよい（それを推進する）言説としてのイデオロギー[イーグルトン 1999: 28-39]。支配者側とそれに対抗する側のいずれであるかを問わないが[イーグルトン 1999: 30]、とりわけ支配階級について言われるときには、その権力を「正当化」したり「自然化」したりするその機能などが注目されるだろう[イーグルトン 1999: 28-29,78,80]。一般化するとこれは、イデオロギーということで、特定の観念や言説が政治闘争や社会生活において果たす効果や機能を問題にするという視点であるといえる。

こうした意味でのイデオロギーには、単に結果的にのみ特定の立場を利することになるような信念（特定の利害を推進するという明白な意図のない）から、自らの利害のために他者を言いくるめようとするような露骨で見え透いた、自覚的な嘘をも含む言説までが含まれることになる。イーグルトンはしばしば後者の露骨で見え透いた言説を引き合いに出しつつ議論を進める傾向がある（e.g. [イーグルトン 1999: 48]）。しかし彼自身別の箇所

で認めているように (e.g. [イーグルトン 1999: 78]) それはイデオロギーの問題を一種の語用論の問題にしてしまう危険をつねにともなっている¹。

グラムスはイデオロギーの研究において、語用論的な党派的言説の使用に重点をおくことが問題をゆがめてしまうと指摘している。「イデオロギーの価値を考える際に犯す誤りの一因は、特定の構造がもつ必然的な上部構造にも、特定の諸個人による恣意的捏造にも、イデオロギーという名称が与えられるという事実によるもののように思われる」。重要なのは「歴史的に有機的な、つまりある特定の構造に必然的なイデオロギー」であり、「恣意的かつ合理主義的で『望みどおり』のイデオロギー」つまり個々人の露骨に党派的利益の推進をもくろんだ言説とは区別されねばならない。前者が「『心理的』有効性」をもち、人々の実践を組織し戦いの場を形成するものであるのに対し、後者は「個人的・論争的な『運動』しか生み出さない」からである[片桐編 2001: 146]。

意図的で見え透いた党派的言説に注目すること、相手の見え透いたうそを見抜くこと、これらが重要でないとは言わない。それはなによりも重要な政治的実践の一部でありうる。しかし理論的にはあまり興味深い問題ではない。誰かが自分たちの有利にことを運ぶべく(うそも含めて)巧みな言葉を用いることなど、どこにでもあるありふれた話である。うそつきには好きなだけ破廉恥なうそをつかせればよい。そんなうそが通用するのはせいぜい一時的である²。非難すべき行為ではあろうが、理論的に重要な問いをつきつける類のも

¹ 語用論 Pragmatics は、意味論 Semantics 統辞論 Syntax に対して、言語と使用者の関係を研究する言語学の部門であり、言語使用者が特定の効果をねらってどのように言語を使用しているか、つまり言語の効果の側面についての研究部門である。ここでは後に、別の意味でジェイムズのプラグマティズムについて論じることになるので、それとの混乱を避けるために語用論/プラグマティズムを訳しわけている。

² イデオロギーを通常の意味でのあからさまな「嘘」として、そしてイデオロギーを単なる「嘘つき」として解釈する、つまりイデオロギーの問題を語用論の問題にしてしまうことには、それ自体やっかいなパラドクスがともなう。仮に「嘘つきイデオロギーのパラドクス」と呼んでおきたい。デイヴィッドソン[デイヴィッドソン 1991: 150]にならって、人々の信念が大量の虚偽から成り立っていることがありえないということを確認しておこう。虚偽とは定義によると、世界についての誤情報である。誤った情報を基にして行動すると、思わしくない結果に終わる可能性が大きい。それゆえ、世界についての重要な部分における虚偽の信念を保持し続けることは不可能であるというわけだ。実践に大きな違いをもたらす重要な嘘であればあるほど、それを信じさせ続けることが原則的には困難になる。人間世界において嘘を維持するのは難しい。イデオロギーが実際に嘘ばかりついているなら、その嘘は露見してしまう可能性が高く、人々はそうした嘘つきの言うことを信じないだろう。したがって、イデオロギーの嘘が人々に信じられるためには、彼はほとんどの場合において嘘ではなく本当のことを言う男でなければならない。ひとつの嘘を信じさせるために、いったいどれだけの本当のことを言わねばならないのだろうか。おまけに彼は重要な嘘は何一つとしてつくことができないのである。もちろん嘘を信じて人々が行動しても、なおかつその結果によって裏切られることがないようになっていけば、その嘘は露見することなく信じられ続けることもありうる。たとえば「夢はそれに向かって努力すればかならず実現する」と、心にもなく吹聴しているイデオロギーがいて、心の中ではそんなことを信じる奴は馬鹿だ、実際にお前らのうちで夢を実現できる奴なんか10%もいないんだと思っているかもしれない。しかしこのイデオロギーの煽りに心を動かされた多くの人々が、自分の夢に対してより多くの注意を払い、それを状況にあわせて修正しつつ、その実

のではない。理論的に注目すべきものがあるとするれば、そうした嘘の類がそのまま真理として通用しているかのように見える場合である。嘘が熱心に信じられるような条件があるとするれば、それらは確かに解明されるに値する。しかし、これは問題を語用論的な水準から、逆にある言説が真なる言説として流通する条件は何かという、見え透いた嘘の問題とは正反対の問題——グラムシが言うところの「歴史的に有機的」で「ある特定の構造に必然的な」イデオロギーの問題——に焦点を移すことでもある。

したがって私は、イデオロギーのこの側面は発話の意図の問題とは切り離して考えた方がよいのではないかと思う。たしかに言説はさまざまな立場にとってさまざまに異なる価値を持つ。ある言説の流通が結果としてある特定の党派の利害を推進し、別の党派の利害にとっては障害になるといったことが生じうる。社会空間は、さまざまな党派の立場に結びついたり結びつかなくなったりする、ときに互いに矛盾するような異質で雑多な言説が流通する場、言説空間としてながめられる。問いは、特定の言説を流通させようとするさまざまな党派の立場の意図とは別に、それらが嘘からあるいは悪辣な意図から出たものであろうとなかろうと、結果的にそこである効果をもつ特定の言説が、もし広く流通し受け入れられるといったことがあるとするれば、それはどのようにしてか、という形をとるだろう。さらに言説の流通の社会的効果を、なにもどこか特定の党派にとっての利益、不利益に限定する必要もあるまい。損得だけしか問題にしないのは、それでなくても狭量な考えだ。イデオロギーについてのイーグルトンの問題系のこの部分は、したがって、言説空間におけるさまざまな言説の流通状況と、その配位が全体的社会過程に及ぼす効果を明らかにするという課題に置き換えることができるだろう。

個人的な利害か、集団的な利害に関係するかで、言説のイデオロギー性を区別しようとするイーグルトンの試み (e.g. [イーグルトン 1999: 34, 57]) は、発話主体の意図性を問題にし続けるならあまり成功しないだろう。単なる個人としての自分に都合がよい (悪い) ということと、集団や社会の一員としての自分に都合がよいということの区別を、発話者はいちいち意識してなどいないからである。またイーグルトンが示唆するように (e.g. [イーグルトン 1999: 35])、ことはその内容の社会的重要性だけに左右されるわけでもない。問題は結果としての言説空間上での分布と効果の方なのである。

そもそも語用論的な意図がどうであれ、意図自体はその言説が言説空間で繰り返し転送され広がり、一定の社会的効果を発揮することを保証しない。むしろそうした意図の存在が明るみに出るとは、逆にその流通と社会的効果を阻害するかもしれない。反対に、確率論の文脈でしばしば引き合いに出される、闇雲にタイプライターのキーをたたくチンパンジーが偶然打ち出したにすぎない語りですら、特定のコミュニケーション空間の中に投

現をひたすら目指して努力するならば、多くの人々が夢を実現させるという結果に終わるかもしれない。イデオロギーは、自分は嘘を言っているつもりでいても、実際には彼は本当のことを言ったことになってしまう。

げ込まれるとき、大きな社会的効果をもつということもありうる。言説の生命にとっては、その誕生よりも、複製と転送の過程の方がはるかに重要である。コミュニケーション空間が、どんな風に特定の語りをひいきし（それを繰り返し複製し、転送し、種々のバリエーションを生み出しつつ社会空間に蔓延させ）、特定の語りを排除するか、それが語りの運命を決めるのである。

III 集団の経験との固有のつながり：人々は観念を生み出すのか

特定の社会集団に固有の観念[イーグルトン 1999: 22]、「世界観」やものの考え方[イーグルトン 1999: 77]、「象徴的な自己表現」[イーグルトン 1999: 78]、つまり特定の社会集団が経験する固有の現実から発する意識や言説という問題系。階級意識とか世界観、社会的ポジションによる知識・認識の被拘束性などについて議論するとき[イーグルトン 1999: 第4章]、主として問題になっているのはこれである。イーグルトンはこの見方だけでは不十分であることを繰り返し強調するが（e.g. [イーグルトン 1999: 22, 78]）、これがイデオロギーのもっとも基本的な属性であることは、彼がイデオロギーの一連の定義について論じる際に、つねに真っ先にこれをとりあげていることから明らかである[イーグルトン 1999: 22, 78]。

特定の観念と、特定の社会集団あるいは社会状況との連動というこの問題は、前節の問題系とは別個に扱われるべきだろう。もちろん、なぜ特定の語りが特定の社会集団に固有となっているのかという問いの答えとして、それがその集団を利するからという説明がつねに可能であり、それゆえこの問題系は前節の問題系と無関係ではない。しかしこうした見方は特定の社会集団とそれに固有な観念とのつながりについての部分的な説明でしかない。ある観念は、それを抱いている集団の人々を利するものであるかもしれないし、逆にその集団の人々にとってはむしろ不利になる、他の集団にとって好都合なものであるかもしれない。さらに、どんな集団の利害とも無関係であるかもしれない。

そもそも従来からイデオロギー論は、「被支配者階層」の今の苦境を再生産するだけの、単に「支配階級」にとって都合のよいだけの観念が、被支配者集団の人々が抱く観念として流布しているような状況を好んで問題にしてはこなかっただろうか。このケースは、特定の社会集団に固有の観念を、その社会集団の人々に固有の社会的経験や彼らの構造上の位置から生まれたものとする説明には都合が悪い。実際にそんなことがありうるとしての話だが、このケースは支配階級が創り出した言説が被支配者たちによって受容され、後者によって抱かれる観念となる、つまり特定の集団に見られる観念が他の集団に由来するものでありうるという事態の一例になってしまっているからだ。

グラムシがイデオロギーという概念を、党派的な利害から出た恣意的捏造とは区別して、「歴史的に有機的な、つまりある特定の構造に必然的な」ものを指すためにとおうとしたことはすでに見たとおりであるが、もしこの特定の構造との必然的なつながりを発

生論的に——つまり特定の構造がそれに固有の特定の言説を生むという関係として——理解するなら、それは間違いであったということになる。特定の社会集団の人々は、自分たちに固有の観念を、必ずしも自分たちの置かれた固有の社会的位置とそこでの経験にもとづいて生み出しているとは限らない。自分たちの経験に基づいてどころか、そもそもそれらが他の集団に由来している可能性があるというのだから。彼のヘゲモニーの概念は、この謎をもっとも先鋭的な形で示したものである。

再びここでも前節において見たのと同じように、重要なのは発生関係、つまりその言説を最初に誰が作り出したのかという問題ではなく、それが何を起源としてもっていようと（敵の党派、自分自身、あるいは闇雲にタイプライターをたたきまくるチンパンジー）、特定の言説がその特定の社会空間において繰り返し複製され、転送され、そこにとどまり続けているのはなぜかという問題の方である。

語用論的な問題——だましているとかだまされているとか——を度外視すれば、真の問題は、ある特定の観念がそれを抱いている人々の利害にむしろ反したり、結果的に他の党派を利することになっていたりするように見えるときに、いったい何がその観念をその人々に抱かせ続けているのか、つまり何がそれを彼らの所属する言説空間にとどまり続けさせているのか、という問題である。イデオロギーと特定の歴史的経験との「有機的」なつながりも、この問いとの関係で説明されねばならないだろう。

ある集団に固有の観念を発生論的に、つまりその集団の人々をそれらの観念生産の主体としてとらえる見方はきわめて根強いものがあるので、こうした発生論的な見方が誤りであることを、この際きちんと指摘しておく必要があるかもしれない。

特定の境遇に生きる人々が、彼らの経験のなかから彼らに固有の一群の観念を作り出すという構図は、人類学においてはあまりにもおなじみの構図である。「文化」という概念そのものがその一例に他ならない。なぜある特定の観念がしかじかの集団において見られるのかという問いは、しばしばそうした観念を人々が生み出した理由（あるいは原因）を示すことで答えようとされる。たとえばタウシグは南米の農民のあいだにひろく流通している観念——悪魔と契約し、その塑像（muneco）を用いることによって、他人よりも多くの仕事ができ、多くの収入を手に入れることができる。でも手に入れられた金は不毛で、すぐになくなり、本人の寿命も短くなる、といった——について、プランテーション農業を通じて伝統的なサブシステム経済から資本主義経済への移行を経験しつつある南米の農民たちの目にうつる、貨幣の獲得を自己目的とした資本主義的交換関係の倒錯性・非人間性を表現したものであり、資本主義に対する彼ら農民による解釈と異議申し立てに他ならないという説明をしている[Taussig 1980]。資本主義の謎めいた仕組みについてわからないまま、人々は資本主義システムを経験する。この経験が、悪魔との契約の観念を生み出したのだというのである。ここでは人々はこうした観念の生みの親、生産者として登場している。

しかしちょっと考えてみると、これはおかしい説明である。「人々」という複数形の主語がまずおかしい。人々がこうした観念を作り出したというのだが、まさかみんなで頭をつき合わせて作り出したというわけではあるまい。人々全員が、同じ観念を各自独立にそれぞれ作り出したというのもありそうにないことである。人々がある観念を生み出した、という文が具体的にはいったい何を指しているのか、さっぱりわからないのである。各自が同時にというのでも、全員が協力してというのでもないとするれば、どんな風に「人々」は観念であれなんであれを作り出したといえるのだろうか。実は彼らのうちの誰かが作り出しただけで、他の人々はそれを受け入れたのだということだろうか。そうすると資本主義システムをそのような形で解釈したり、そうした観念によってそれに異議をとらえたりといったことは、この観念の作り手であるその特定の誰かについてはそのとおりでありえても、他の「人々」についてはかならずしも当てはまらないことになる。悪魔との契約の話が誰かから聞いて、面白がったり恐れたり不思議に思ったり、他の人にそれを転送したり、皆でその話題に熱中したりする行為自体は、どう見ても資本主義に対する自らの経験を解釈し、それに異議を申し立てる類の行為ではないだろう。そして実際のところ、人々のほとんどは（可能性としては全員が）この観念の作り手であるというよりは、単なる転送者にすぎないのだ。とすれば説明すべきは、その観念がどんな風に生まれたかではなく、それがいかに受容され、さまざまに変異しつつ転送され続けているかの方である。われわれは分析の焦点を、観念の誕生＝製作者にではなく、その語り継ぎ・転送のプロセスに向けるべきなのである。人々の実践や経験との連動関係が明らかになるとすれば、こうした転送の条件の解明においてしかない。極端な話、特定の観念がどこからその言説空間にやってきたのか——その内部で生まれたのか、あるいはどこから持ち込まれたのか、それとも件のチンパンジーがたたき出したのか——は、この問題にとってほとんどどうでもよい。

人類学者はしばしば、その「特定の観念」の由来、起源を問いたくなる。しかし実際には起源は問題ではないし、そもそも問題にしないのだ。「都市伝説」の類の噂話を最初に語った人物を問題にすることが不毛であるように。誰もがつねに誰かから聞いた話としてそれを語る。語りが変形したり、逸脱したりしつつ転送され続けられる一連のプロセスがあるだけである。人類学者が特定の観念・言説の誕生、あるいは当該言説空間への登場の瞬間を目撃することは原理的に不可能である。同時代の生物学者が、ゆくゆくは新種へと進化していく生物の最初の祖先が誕生した瞬間に立ち会ったとしても、そのことを原理的に知りえないのと同様である。その生物がまさに後に新種として成立する生物の最初の祖先であったとわかるのは、つねに一連の進化のプロセスが終わった後でだからだ[デネット 2001: 134]。

特定の言説空間で広く流通しているいかなる観念も、それが生まれた特定の状況による決定的な起源などもっていない。おそらく同じようないくつもの観念とそのさまざまなバ

リエーションがどんな時代においても繰り返し繰り返し登場しているにちがいない。多種多様な、はるかに荒唐無稽なものから、陳腐なものまで、さまざまな観念が言説空間に繰り返し登場し、そこでの転送過程に投げ込まれる。しかしそのほとんどは単に登場したその場で忘れ去られたり、複製されなかつたり、誰にも転送されなかつたりして消えてしまう³。ある観念が人々におおいに「受け」、みんなの格好の話題となり、複製転送が繰り返される一方、同じく「受けて」もおかしくなかつた別の観念は、まるで相手にもされず消えていってしまう。言説空間は、さまざまな語りや観念にとっては一種の自然淘汰の場でもある。言説空間におけるこの「自然淘汰」を潜り抜けたもの、言い換えれば結果的に人々によって複製・変奏され、転送され、そして言説空間を流通し続けることに見事に成功したもののだけが、その集団に固有の観念として人類学者のもとまで届けられるのである。問題は、こうした選別がどのようにして働くのかということである⁴。

特定の社会空間において、どのような特徴をもった観念がどのような経緯で生き残り広く流通し続けるという結果を手に入れるのだろうか。これが問うべき問いであり、人々にとって都合がよいから、あるいは誰かを利するからというのは、それについての可能な説明のうちのほんのひとつに過ぎない。

おそらくあらゆる流行現象についてそうであるように、特定の観念が登場してくる、あるいはある些細な変形が既存の観念に加えられる瞬間においては、それが後にその言説空

³ 複製・転送を変形との対立でとらえないようにしよう。複製こそが変形が加えられる場所であり、またあるものを変形、変造することが、それをまったく取り上げずに消え去らせることとの対立において、まさに複製・転送の一形態であるということは、あらためて述べるまでもないであろう。

⁴ この覚書における一連の議論が進化論的な響きをもっていることに気づかれるだろう。実際、昨年（2005年）の秋から、私が人類学を専攻して以来ある意味で敬遠し敵視してきた進化論について集中して再学習を始め、一連の進化論の議論、とりわけドーキンズの議論に大きく影響を受けたことを認めておきたい。ドーキンズの議論については反論すべき点も多い。とりわけ彼のミームの概念（これは遺伝子との類比を文化の伝達に見出そうとしたもの）には問題がある。生物学においては自己複製の単位をなんらかの実体＝モノと考えることに問題はないかもしれないが、文化現象とりわけ表象関係においては、複製の単位をなんらかのモノと見なすことはまったくの的外れである。そこで複製されるのはパターンであり、パターンはその項を構成する個物がまったく異質なものに置き換わっても、そのまま同一性を維持することをその特徴とする。項よりも関係態の方に注目せねばならないのだ。ドーキンズと彼の追従者は文化の領域においてもやはり「自己複製子」を実体として考え続けている。にもかかわらず、私はドーキンズの一連の著作を通じてダーウィンの進化論が意味するもの、その最も革新的なロジックについて再発見させられた。そして自分でも意外なことに、私の前著『秩序の方法』が基本的にはダーウィン進化のロジックと同様な論理で構成されており、私が到達したと信じた結論——基本的にはこの覚書において提示しているような考え方だったのだ——もダーウィン進化の言葉でより簡単に言い表せることに気づかされた。残念ながらこの覚書のなかに直接の引用の形でとりこむことができるほど、この影響は私の中にあってもまだ十分には咀嚼されていない。ドーキンズを直接引用することで彼の実体主義的なスタンスをも継承したように理解されても困る。この註の形で、ドーキンズの一連の著作に対する謝意を表明するにとどめたいと思う。

間でどのような位置をしめることになるかを前もって予測することなどできない。しかし現にある特定の観念が支配的になった後から振り返ると、まるでその特定の観念の流行と状況とのあいだになんらかの必然的・有機的な結びつきがあったかのように見えることがある。実際には問題の観念の流通こそが、状況のその特徴を可視的なものにしたのであるが。すべてが終わった後で回顧的に眺める人類学者の目に、もし、あたかもそれが当の観念を流通させている人々の現実経験から生まれてきたものであるかのように見えるとすれば、あるいはその観念が人々の経験に対する一種のコメンタリや異議申し立ての表現であるかのように見えるとすれば、この不思議な照応関係も、まさにいわば発生における偶然性を回顧的な必然性に転化させるかのように見えるこのコミュニケーション空間における転送と選別のプロセスのなかにこそ、解明されねばならないだろう。

IV イデオロギーの虚偽性

イーグルトンの問題系の三番目は、そしてイーグルトンが本書全体を通じてもっとも多くの議論を割いているのが、イデオロギーの虚偽性の問題である[イーグルトン 1999: 39-76]。以上の議論も最終的にはここに収斂してくることになるが、それを明らかにする前に、イデオロギーの虚偽性という問題設定そのものが抱えている問題について簡単に整理しておきたい。

1 虚偽性について語ることの困難

ある言説をイデオロギーとして問題にするときには、しばしばその言説に含まれる虚偽性が問題になっていた。虚偽性はイデオロギーの中心的な特徴のひとつとさえ見なされていた。それはけっして語用論的な問題にとどまらないことに注意せねばならない。繰り返しになるが、仮にこうした意図的な虚偽においてすら、問題は言わば騙す方の問題ではなく、騙される方の問題だからだ⁵。つまり、あからさまな嘘であれなんであれ、問題はそれが人々によって受け入れられ、転送され続けるということの方にある。人は単発の嘘には一時的には騙されやすい生き物だが、嘘を繰り返し持続的に生きることはそうたやすいことではないからだ。そう考えるとなぜことさら虚偽性が大きな問題になるのかがわかる。「真」なる観念が受け入れられ、転送され続けるとしても、いっけん何の不思議もないように思える（もちろん「真」であることが言説空間におけるその流通を請合ってくれるわけではないのだが）。虚偽であるからこそ、それが不思議で説明を要する出来事に見えるのだ。

しかし虚偽性の問題はやっかいな困難をかかえている。言説の虚偽性はなんらかの真理との対比によってしか示せないが、その基準となる真理を誰がどう確保しているというの

⁵ すでに言及した「嘘つきイデオログのパラドクス」（脚注2）参照のこと。

か。客観的で科学的な真理が誰にとっても正しい手順によってアクセス可能と考えられているところでは、基準となる真理の存在を確信することもそう難しい問題ではなかっただろう。しかしイーグルトンも認めるように[イーグルトン 1999: 40]残念ながら、万人が認める形でつねに唯一の客観的な真理へのアクセスが保証されていることは、今日ではそれほど当然だとは考えられないようになってきている。真理の対応理論も今日ではやや分が悪い[イーグルトン 1999: 40]。現実を正しく反映したものが真理であるとして、言説の真偽を現実との照合関係に求めようにも、それについてのさまざまな記述（まさにその真偽が問題になっている当の言説たち）とは別に、それらとは独立に現実そのものを捉えるすべがないとすれば、その照合作業なるものはいったいどんなものになってしまうだろう。記述（説明）と、記述される現実との間の反照規定性（相互反照性 *reflexivity*）として知られている問題である。記述は記述される現実の構成的な一部なのであり、この意味で、特定の記述が特定の現実を作り出している（その特定の特性を可視化する）とさえ言えるのである（e.g. [Leiter 1980]）。イーグルトンがイデオロギーの虚偽性という観点を保持するのに、客観的な事実との照合という手段に訴えることを避け、虚偽性のそれ以外のさまざまなあり方について長々と述べなければならないのも、まさにこの問題のせいなのである。

彼があげるリストは順不同に列挙すればざっと以下のような具合である。語りはそれぞれ単独での真偽が問題なのではない。個々の語りは、なにか特定の世界観、観点を支えるために動員されているのかもしれない。そうした場合、個々の要素の真偽については問題がなくても、それらの要素が支えている世界観が「間違っている」ことがありうる[イーグルトン 1999: 64-67]。あるいは個々の語りは真であると言えても、それを語る動機が「間違っている」こともありうる。つまりそれは邪悪な「間違った」狙いを背後にもっているかもしれない[イーグルトン 1999: 49-52, 69-70]。あるいは信念として表明されることと実際の行為とのあいだに矛盾や齟齬がある——人種差別は悪いことだと主張する一方で、治安上の問題といった「現実的」な理由からならば白人専用のレストランを利用する、など——かもしれない[イーグルトン 1999: 68, 99-100]。あるいは語りの内容についてあれこれ言う以前に、コミュニケーションのあり方そのものが「間違っている」つまり歪んでいるということもある[イーグルトン 1999: 40, 270-286]。仮に疑問を感じても、ある人々の、あるいはある場でなされる語りに対する異議申し立てが原理的に不可能にされていることによって、その語りが全員に受け入れられているかのような様相を呈するとか、ある用語がそれが本来指示することになっていただろうものとは別の、正反対のものをシステマティックに指示するように——家庭内で親が振るう暴力が一貫して「愛」として語られ続けるなど——用いられるといったケースである。あるいは個別の語りは仮に正しいとしても、それが単に部分的な記述にしかなくない——全体的な連関についての認識が阻まれている——という意味で「間違っている」のかもしれない[イーグルトン 1999:

211-214]。あるいは表立って語られたことに間違いはないのだが、その背景に実は不問の前提として、それについて語ったり問題にしたりすることすら阻まれているようないくつかの事柄があるかもしれない。語りうる内容にこうした暗黙の制約があるという点で、それは「間違っている」[イーグルトン 1999: 135-136]。最後にマルクスが解明した商品の物神性に見られる意識のように、意識が現実を転倒させてとらえているのではなく、実は当の現実そのものが「間違っている」つまりある種の転倒を含んでおり、思考は単にそうした偽りの状況を正しく忠実にとらえているだけであるということもありうる[イーグルトン 1999: 187-190, 228-229]。等々⁶。

イーグルトンによるこの虚偽あるいは錯誤のリストは印象的であるし、その一つ一つが重要な論点を含んでいることは確かである。しかし個々の言説と現実との照合による真偽の決定という問題をこのように避けたとしても、この解決は結局別のレベルで同じ問題を召喚してしまう。どの水準であれ、何かを「間違っている」というためには、結局本来の「正しい」ものとの対比において言うしかないからである。

2 言説空間における真偽の問題

観念の真偽の問題を、外在する「客観的」世界との照合関係のような絶対的基準によらずに考えることはできないのだろうか。その出発点となる代案を提案したい。真偽がどうでもよい問題だということではない。しかし、ある社会空間において特定の観念が真として通用しているとき、人々が真だとしているその観念が本当にあるいは客観的にも真であるかどうかを問うことにはあまり意味がない。むしろそれらがいかなるプロセスによってその真という地位を自らに確保しているのか、それを明らかにせねばならない。つまり真として流通しているいかなる観念も、それをその特定の社会空間において「真」にする特定のプロセスとの関係でとらえられねばならないだろう。この見方は、その観念が、たまたまわれわれにとっても真であるか偽であるかには関係ない。たとえわれわれにとっての真とそれがたまたま一致していたとしても、その特定の社会空間においてそれを真にしているプロセスを問題にしないでもよいということにはならない。このプロセスを私は「真理化のプロセス」と呼ぶことにしたい。

⁶ イーグルトン前掲書の第一章にこのリストは登場し、以下の各章はそれぞれの論点を個別に展開したものにもなっている。しかしこの虚偽性に対する拘りは胡散臭くもある。特定の言説空間において真として流通しているものが「客観的にも真」であるかどうか、「ほんとうに真」でもあるかどうかを問う立場とは、客観的真理に実際にアクセスできる立場だけだからだ。しかし、他の人々が分析者自身の知識に照らして真でないものを真と考えているというケースが、そうでない場合に比べて特に解明を要する問題だというわけではあるまい。彼らが仮にわれわれも真だと考えているものを真だと考えていてくれる場合には、解明すべき問題はなくなるとでもいうのだろうか。特定の観念が、特定の言説空間において真として流通する理由を明らかにしたいときに、その特定の観念がたまたまわれわれの基準から見ても真であるかそうでないかで、なすべき説明の種類が変わってくるわけでもなからう。

3 真理化のプロセス

特定の言説空間において何が真とされているかのみを問題とするなどという、ただちに、それは悪しき相対主義だという非難を喚起しそうである。それは真についての一切の基準を放棄し、なんでもありにしてしまう見方だと。この点について誤解を解いておくことは、ここで提唱したいと考えている見方の性格を明らかにするのに役立つだろう。

悪しき相対主義も、その反対の、唯一の客観的真理が存在するという立場も、一見するどく対立しているように見えながら、ともに観念の真偽を世界との照合関係と考える静態的な真理観念に基づいているという点では、あまり違いがない。悪しき相対主義のほうは、それぞれに相容れない競合する真なる観念は、それぞれの観念に符合する別個の世界に対応していると考える。世界の複数性に前もって制約を認めないとすれば、これはいわゆる「なんでもあり」の立場に近づく。これに対して唯一の客観的真理の存在を信奉する立場は、世界の複数性を否定し唯一の世界のみを認める。その世界に符合する観念だけが真理なのである。唯一の客観世界のみを認めるか、観念体系（記号体系）に応じた複数の世界を認めるかの違いはあるが、いずれの立場も世界との一致不一致において観念の真偽を問題にする。

しかし観念と世界を「照合する」という作業が具体的にどのような行為からなるのかについては、いずれの立場も奇妙なことにならずしも明確にしていない。二つのものを見比べて——買い物リストとショッピングバッグの中身を照らし合わせるように——両者の一致具合を見てとるとでもいったようなそんなイメージだろうか。しかし世界を知る、あるいは世界から情報を引き出すという行為が、超然とした認識者が行う観察のような受動的なプロセスでないことは、心理学者たちによって以前から指摘されている。たとえばナイサーは次のような例で知覚の能動性を明らかにする (e.g. [Neisser 1976: 20-21])。

箱の中に花瓶が入っていることを確かめるよう言われたと考えてみよう。つまり「箱の中に花瓶がある」という観念を、現実と照合しようというわけである。ただしあなたは目隠しをされており、手だけを使って確認せねばならないとする。あなたは箱の中に手を突っ込み、その中にあるものに触れるだろう。ただ手をじっとその物体において、触覚を研ぎ澄まし、その物体から諸君の触覚に伝わってくるものを読み取ろうとするだろうか。おそらくそんなことはしない。そんな受動的な認知では、対象についてほとんどなにもわからないだろう。あなたは手を動かしてその物体をまさぐらねばならないはずである。それもけっしてランダムにではない。手の動きは「花瓶」という概念に導かれた一定のプランに暗黙に従っている。手は花瓶を予想しながら動く。そしてその特殊な手の動きに対して中の物体がどのように応じるかによって、その物体についてのさらなる情報が手に入り、あなたはそれが花瓶であることを確信していく。もし中に入っているものについて、何のヒントも与えられていなかったとしたら、手の動きは最初はいくぶんランダムかもしれな

い。しかし少しずつそれはなんらかのプランに従った動きになり、そして最後には確固たる自信に満ちたものになっていくだろう。最初のランダムな手の動きによってあなたはその物体についての漠然とした情報を手に入れる。そしてその情報を手がかりにして、ある種の予測のもとに、手の動きは次第に系統だったものになり、それによってもたらされた情報が予測を修正／確証していくにつれ、手の動きは断固たるものとなり、予測は次第に確信へと変わっていく。

我々が世界について知るには、世界に対してなんらかの探索プランに従った働きかけを行う必要がある。そしてその働きかけに対する世界からの応答が、我々の探索プランの修正／精緻化のプロセスとともに、世界についての認識をもたらす。認識とはこのようにきわめて能動的なプロセスである⁷。それが人に世界について真なる観念をもたらす。

注意せねばならないのは、こうしてもたらされた真なる観念は、世界に対するこの働きかけと応答の一連のプロセスとの関係においてのみ「真」だということである。そしてこのプロセスが必ずしも一つではないという点も忘れてはならない。

たとえば特定の集団の人々について、彼らの友好性を知ろうと考えたとしよう。ちょっと極端な例ではあるが、ある人はその集団の人々に対して些細な挑発を繰り返し、それに人々がどんな風に応答するかを見るという形でこの探索を行ったとする。そして別の人は、その集団の人々に対して、出会う人ごとにとりあえず愛情を込めて抱きついていくという探索プランをとった。さらに別の人は、疑り深く慎重に人々との距離をとりながら情報を得るというやり方をとった。お分かりのように、最初の方は、その集団の人々が敵対的であるという結論を出す可能性が高く、二番目の人は、その集団の人々の友好性に気づく結果となり、三番目の人はその集団の人々が強い猜疑心をもっているという結論をだす公算が高い。確認する方法によってそれぞれ特定の探索応答のプロセスが生じ、そこに何が見出されるかが変わってくる。いずれの場合も結論はその集団の人々について「真」であるといえる。ただしそれぞれの一連の知識獲得のプロセスとの関係においてのみ「真」なのである。

このいささかでの悪い例は、私がウィリアム・ジェイムズに倣って「観念の真理化のプロセス」と呼んでいるものの特殊例にあたる。ジェイムズのプラグマティズムについてはしばしば、観念の真理性はそれが生活の役にたつかどうかだという主張として理解されているが、これは誤解を生みやすい言い方である。彼の「真理過程」の概念については、彼自身の用いたたとえ話がわかりやすい。森の中で迷って、牝牛が通ったらしい小路を発見する。あなたは「この小路をたどっていけば人間の住み家があるに違いない」と考える。この観念はそれに基づいた行為を導くだろう。「ウシのたどった小路をたどっていけば一軒の家があると頭で考えてその家の心象に従っていくと、われわれは現実にその家に辿り

⁷ Neisser はこれを能動的知覚 Active perception という名前と呼んでいる[Neisser 1976]。

つく。つまりわれわれはその心象の十分な真理化を得る。そのような単純かつ十分に真理化された導きが確かに真理過程の本源であり原形なのである。」[ジェイムズ 2004: 150] つまり観念は、それによって導かれた行為が、まさにその通りの結果にいたることによって「真」となる。これが「真理過程」、観念の真理化のプロセスである。認識はこうした過程の特殊例である。花瓶の観念に導かれて、箱の中を探索して、そこに確かに花瓶を見出すという私が最初にあげた例は、そのあまりにもストレートな形態である。あるいは相手は敵対的な人々かもしれないと考えて、相手をあれこれ挑発してみて、まさに相手が敵対的であることを見出すといった場合も。しかしこのような単純なケースはむしろまれであろう。通常は、最初もつとぼんやりした観念から出発し（「箱の中に何かが入っている」といった）それによって導かれた探索が、その結果見出すものを繰り返して、さらに精緻化された探索を導き...といった複雑な過程をたどるにちがいない。

「真理過程の領域においては、もろもろの事実は独立してあらわれて、われわれの信念を一時的に規定するのである。しかしこれらの信念はわれわれを行動させる、そして信念が行動を惹き起こすや否や、信念は新しい諸事実を視界内に、もしくは存在内に、もたらしてくるが、この新しい諸事実はそれぞれそれなりに信念を再び規定するにいたるのである。このようにして真理は、糸毬が巻き糸と毬の両者によって転がるにつれて大きくなるように、二重の影響の所産なのである。真理は事実から出てくる、しかし真理はまた進んで事実のなかに浸り入り、事実に関係を付け加える。この事実がまた新しい真理を創造もしくは啓示（言葉はどうしても構わない）する、こうして無限に進んで行くのである。」[ジェイムズ 2004: 165]

ジェイムズのプラグマティズムは、真なる観念とは役に立つ観念のことであるという定式化から想像される身も蓋もない功利主義的な考え方ではけっしてない。「真」であることが特定の「真理過程」あるいは真理化のプロセスと独立には問題にできないという考え方である。特定の観念に導かれて行動することによって事がうまく運ぶこと、それがとりもなおさずその観念が真であるということである。それは実践の進行につれて特定の観念が確認され、修正され、精緻化されていく過程であると同時に、そうした随時変化する「真」なる観念に導かれて、実践が方向付けられていく過程でもある。こうした、実践と世界との微細チューニングの過程、それこそが真理化のプロセスなのである。

プラグマティズムの真理観は、なんらかの具体的な真理化のプロセスとは独立に、その内容について知ることが可能であるような客観的な現実のようなものを想定していない。しかし、いかなる観念もそれに照合する世界においては真であるという、いわば「なんでもあり」の悪しき相対主義的な真理概念とも無縁である。ある観念が真であることを認めるためには、単にそれが真であるような世界があるかもしれないと主張するだけでは十分ではない。それを真にするような真理化のプロセスをも示さねばならないからである。他方、逆に真理化のプロセス抜きで直接の照合関係だけで真偽をいうこともできない。経験

主義が想定しているように、客観的な世界に前もってなんらかの秩序や構造があり、それによって真理が究極的には保証されていると信じるのは自由である。ただそうしたものの認識に一気にいたるような秘術は存在しない。もしそうした客観的世界自体の客観的属性が仮に存在するとしても、それはなんらかの特定の真理化のプロセスである一連の具体的な行為連鎖・実践のシステムを通じて、限定的で随時変更可能なものとして開示されるほかない。上の引用にもあるように、「真理過程」は「無限に進んでいく」過程であり、真理はつねに暫定的であるしかなく、またその都度の特定の真理化のプロセスに依存しており、それゆえ、いかなる意味においても最終的・固定的なものではありえない。とするとそうした客観世界の存在をいきなり出発点に仮定してしまう経験主義とは、プラグマティズムの観点から見ると、永遠に確証不可能なものをいきなり前提にもってきってしまう立場だということになるし、そうした客観世界の存在を仮定してみたところで実際にはなんの役にも立たないのである⁸。

私が加えてしまった微妙な強調のせいで、真理化のプロセスをやや認識寄りに、科学における仮説検証の作業に類するものであるかのように考えるという誤解が生じる恐れがある。言うまでもなく強調点はここにはない。もちろん科学実践における仮説検証の作業は、真理化のプロセスの一種——しかもそれ自体を目的とした——ではあろうが、真理化のプロセス一般はけっして特定の観念が真理であることの確認そのものを目的とした行為連鎖ではない。ジェイムズが用いている例においても、「ウシが通ったらしい小路をたどっていくと人間の住み家がある」という命題の確認そのものが「目的」などではなかった。そもそもそれは道に迷った者が自分の置かれた状況からなんとか抜け出そうとするサバイバルの行為であった。しかし、まさにそれがとりもなおさず真理化のプロセスでもあるというのがポイントであり、その観念にしたがって行為することによって窮地をうまく切り抜けられることが、まさにその観念が真理であること（真理化すること）と同じことだといふのである。真理は、世界の中で実際的に行為すること、世界にうまくチューンをあわせながら生きていくことと不可分である。プラグマティズムの真理観において中心となる考え方——「真理とは生活に役に立つこと」という有名な、誤解を招きやすい例の定義——は、この点を強調しようとしたものなのだ。特定の環境世界の中で、それにチューンをあわせながら、さまざまな問題をクリアし数々のプロジェクトを実行していくという我々の生活実践が、別の角度から見ると真理化のプロセス、当の世界についての自分たちの知識を再生産し修正し精緻化していくプロセスでもあるという考え方である。これがそれを単

⁸ もちろん「客観的世界が存在する」という観念自体は、その他のことに関する真理化のプロセス、探索実践を導くという点で我々の実践システムにとって「役に立」っており、そうした探索実践がだいたいにおいてうまくいくことによって真理化されてもいる。言うまでもなくこれは、外の客観的世界において客観的世界が実際に存在しているから、この観念が真だということではない。

なる経験主義とも、悪しき相対主義を帰結しかねない極端な観念論の形態とも、異なるものになっている。

4 適応的信念は虚偽でありうるか

真理についてこのような観点にたつとき、イデオロギーの虚偽性、あるいは特定の言説空間において現に流通している観念の虚偽性について、どのような見解をとることが可能になるだろうか。「真理」は随時変更可能なものとして、そしてなんらかの特定の実践システムをその真理化のプロセスとしてもつものとして、扱われねばならないだろう。なぜある観念がその言説空間において暫定的な真理として流通しているのか、この問いに対しては、真理の絶対的基準のようなものとの一致不一致によってではなく、それを支えている実践のシステム——真理化のプロセス——の構造によって答えねばならないことになる。

たとえば戸田山が「自然界には偽なる信念の方が真なる信念よりも有利になるような状況がいくらかでもある」[戸田山 2002: 190 傍点は筆者]ことの一例としてあげる例について考えてみよう。ある霊長類の集団が舞台である。彼らの環境に生えているキノコ類のなかに、一種類だけ毒キノコがあり、他のキノコはこの毒キノコときわめて似てはいるが無毒である。さて、これらの霊長類たちはこれらのキノコすべてに手を出さない。つまり「すべてのキノコは有毒である」という「偽なる信念」に従って生きているのだ、というのである。

戸田山がこの霊長類たちの信念を「偽」だと断定する際に、世界の客観的に真の知識、世界は「本当は」どうなっているのかを、こちらがすでに手に入れているという根拠のない自信が働いていることは確かである。無毒だとされているキノコに、実はまだ未知の物質が含まれていて、それは 20 年くらいかかって人間の免疫系を蝕み、たとえばミズムシ菌に対する抵抗力を著しくそこなうといったことがやがて明らかになり、そのキノコが無毒であるという知識が実は偽であったとわかるかもしれないというのに。もしここで対比されている二つの信念の差異が絶対的なものではなく、いずれもそれぞれの生きる社会空間における暫定的な真理であることを認めるなら、問題は「偽なる信念が真なる信念よりも有利」でありうるかどうかという問題ではなく、すべてのキノコに毒があるという信念を暫定的に真として流通させている実践システムの特徴がどのようなものであり、それをあるキノコは有毒だがそれと酷似した別のキノコは無毒であるという、もうひとつの暫定的な真理への修正・移行をもたらす実践システムの変容がどのようなものだろうか、という問いになるだろう。

彼らが「すべてのキノコは有毒である」という観念に導かれて食餌実践を行っている限り、すくなくとも彼らのあいだにキノコの毒によって死ぬものは出ない。別にキノコに手を出さずとも、他に食べるものが豊富にある限りはそれですべてがうまく運ぶ。もちろん

この信念を、われわれにとってより真理らしく見える「特定のキノコだけが有毒である」という観念に修正させるような実践連鎖を考えることはできる。しかし二種の酷似したキノコの区別を学ぶまでに、この霊長類たちが相当数の無意味な死者をださねばならないことは確かである。さてこの状況で、彼らについて彼らが虚偽の信念に基づいて生活していると語ることに、いったいいかなる意味があるだろうか。彼らの全食餌実践システムは彼らのもつその観念を真理化し、それを虚偽として眺める可能性を一切提供していないのであるから、そこではそれは暫定的・近似的にまさしく真なのである。

「すべてのキノコは有毒である」という語りが「真」なるものとして流通する傍らで、それに対抗する「ある種のキノコは無毒である」という語りが繰り返し発生したとしても驚くにはあたらない。ただしこの状況においては、後者の語りを真理化する過程は前者に比してあまりにもリスクが大きいと言えるだろう。しかし他に食べるものが豊富にあるとは言えない状況のもとでは、問題は微妙である。「すべて有毒」を真理化する過程、つまりこの観念に基づいて食餌実践が営まれた結果、必ずしもすべてがうまくはいかず、多くの餓死者を出すようなことになれば、「あるものは無毒」を真理化する、下手をすると毒による何人もの確実な死者をだしかねないギャンブルにも、それなりの勝算が生まれてくることもありうる。真なる知識と実践のシステムがどのように変貌するかには、さまざまな可能性がある。実践システムと環境世界とのチューニングに次のかりそめの安定状態がもたらされるまでは。そして何が次の安定状態であるかは、もちろん、それが実際に結果的にもたらされるまでは、前もって知りえないのである。こうしたそのときどきの安定的知識状態——ある観念（たとえば「すべてのキノコは有毒」）が特定の言説空間においてドミナントなものとして流通している状態——は、けっしていわゆる外在する客観的世界の状態（それが直接知りうるものだとしても）をそのまま反映したものではありえない。

V スケッチ：真理化のプロセスと言説空間の構造

以上の考察を踏まえて、社会空間＝言説空間における観念（信念）・言説の流通と配置に関する問題系の大まかな見取り図を提出しておきたい。

問われるべきは、特定の観念・言説がどのような条件によって、ある社会空間＝言説空間に留まり続けることができているのか、つまり人々によって受け取られ、転送されつづけるのかということであり、人々がどのようにして（あるいはなぜ）その観念・言説を生み出したのかということではない。人類学者が語りえるのは、観念や言説の転送・流通の過程のみである。

私は、特定の観念が言説空間において転送され続けるうえで、真理化のプロセスに注目すべきだと主張してきた。世界について真なる観念として流通しているものは、その真理化のプロセスが分析されねばならない。つまりその観念が真であることを踏まえて人々が行う一連の実践の結果として、その観念がいかに真理化されるかの度合いを明らかにせね

ばならない⁹。本論考での主要な提案はこれに尽きるかもしれない。

イデオロギー概念の基本軸のひとつである、ある言説が特定の党派を利するように機能することがあるという問題も、この真理化のプロセスとの関係でのみ解明できるだろう。真理化のプロセスは、その観念に基づいてなされる実践の環境世界や社会空間におけるあらゆる効果の問題と関係しているからである。ある観念に基づいて実践してうまくいくとすればそれはまさにそうした諸々の効果を通してなのである。

真理化のプロセスが、その観念の転送・流通を保証する際に、考慮に入れるべき要因には他にもいくつもある。ひとつは、社会空間＝言説空間を構成するエージェントの問題である。社会空間に参加しているそれぞれのエージェントの受容能力・転送能力には違いがある。たとえばあるエージェントの語ることは他のエージェントの語るよりも傾聴され、無視されることが少ない。たとえばサバルタンの語りに対して、社会の中心部は聞く耳をもたない。下位者が上位者の発言の意味を読み取り損ねることは彼に致命的な結果をもたらしうるが、上位者は下位者の発言を平気で無視したり誤読したりすることができる。「権力」として問題にされてきたことの少なくとも一部は、こうした言説空間内でのポジションにおける力能と効果の点での違いの問題である。こうした違いは、観念の真理化のプロセスにも当然関与している。

第二に、特定の言説空間を流通している諸観念、命題、語り口などが作り上げている既存のコンテキストが、特定の観念の転送・流通の可能性を前もって制限しているという問題も、真理化のプロセスの前提条件として考慮に入れねばならない。こうした既存のコンテキストは、新たな観念が受け入れられ、複製・変形され、さらに他者に向けて転送されることになるかどうかの最初の選別・篩い分けでありうる。コンテキストにとってあまりに場違いな言説は、この段階で排除される可能性が高いし、新規な観念もこの既存のコンテキストによりぴったり嵌まるように変形されるだろうし、そうした既存のコンテキストの壺に嵌まりやすいものは——単に既存の了解のコンテキストを補強するものだけでなく、図と地を反転させるようにその再編成やよりすっきりした統合をもたらしてくれるものも含め——この段階で成功がおおいに見込まれるだろう。人類学が従来、世界観や文化、象徴体系などの名目のもとで解明・記述してきたのは、まさにこうした言説空間を流通している諸観念が作り上げているコンテキストにほかならなかった。

この言説の既存のコンテキスト、つまり言説空間を流通する諸観念や命題や語り口の常時変動する総体は、任意の観念のさまざまな変異体や、対抗形態、競合形態（最初の語り

⁹ 前節の議論からも明らかなように、真理化のプロセスであるところの実践は、勝つこともあれば負けることもある、無数の主体がそれぞれに行う無数のギャンブル以外の何ものでもない。それが一定のパターンを帰結するとすれば、単に結果的に勝算の大きいギャンブルが生き残り、徐々に社会空間に蔓延したからに他ならない。それを「人々（集合的主体としての）」が行った選別、選択の結果として見る愚は犯さないよう注意せねばならない。

口とは共約不可能な語り口)をも含んだ、きわめて混淆的な総体であり、言説空間での「自然淘汰」におけるその混淆性の意味——もろもろの異質な変異体・対抗競合形態・非共約的形態の相互関係、流通・分布における違い、それぞれの観念がもつ真理化のプロセスの違いなど——も明らかにされねばならないだろう。

したがって私の提案は、人類学で従来からなされてきた二つの研究領域、つまり権力の問題——言説空間での発話と行為における力能と効果の不均衡な配置の問題——、および文化や象徴体系や意味の問題——言説空間を流通する諸観念の配置が形成するパターンの問題——を、言説空間の中で働く真理化のプロセス——世界に対するチューンあわせの実践としての社会的実践の問題——を軸にしてもう一度結び付けてみようという提案にほかならない。

言説空間の内部における二種類の差異の構造（権力と意味）のなかで進行する真理化のプロセスが、個々の観念・言説の言説空間の中での転送・流通・拡散を左右する。つまり個々の観念・言説にとっての淘汰プロセスになる。ここにはダーウィンの進化のアルゴリズムとの類似が見て取れるだろう。特定の歴史的・社会的状況が特定の観念を決定したり生み出したりするわけではない。観念は、個々人の夢の中で、ほんの偶然から、あるいは既存の観念に対する偶然的な変形を通じて、あるいは異邦の空間から、あるいは伝説のチンパンジーがでたらめに打ち続けるタイプライターから、つまりありとあらゆる必然性を欠いたノイズ領域から、言説空間に投げ込まれる。人の脳そのものが、流通している観念を原型をとどめぬままでに変形し、勝手に変異させ、あるいは組み替えて排出するノイズ発生装置のようなものである。観念の誕生や生成について決定論的に論じることが無意味であるのは、この理由からである。しかしどのような経緯で登場したにせよ、観念はいったん言説空間に投げ込まれると、そこでの選択過程（淘汰）にかけられる。真理化のプロセスをもつことに成功した観念のみが、またその成功の度合いに応じて、生き残る。つまり言説空間に複製・転送を通してとどまり続けるのである。真理化のプロセスは、人々の実践と環境世界のチューニングのプロセスでもある。真理化のプロセスをもつことに成功する観念とは、環境とチューニングがあった実践に内在することができる観念であるということになる¹⁰。このように、回顧的に眺められるとき、そしてそのときに限って、流通

¹⁰ 環境世界とのチューニングという表現が、従来の「適応」概念の単なる言い換えに過ぎないとの批判が予想される。私がこの言葉を選んだ理由は、「適応」という言葉が、到達した安定した状態を指す含意をもっているように思えるのに対し、チューニングは常に進行中の不断の実践としてそれをとらえるのにより優れているように思えたこと、「適応」がともすればある種の「善」を含意しているように思われるのに対し、チューニングという表現にはそうした含意がないことである。言うまでもなく、チューニングは単にそれ自体変動するなんらかの対象に対して自らを変調させつつ追従するプロセスである。歪で邪悪なものに対するチューニングはそれ自体歪で邪悪な実践と実践主体を生成する。かくして、たとえば、クラスでの虐め行為を学校という社会空間に対する生徒たちのチューニング実践の産物として眺めるといったことが違和感なく可能になる。

している観念があたかも特定の歴史的・社会的状況に合致し、そこからの産物であるかのように見える。それは自然淘汰のアルゴリズムの結果、生物の形態が特定の環境の産物に見えるというのと同じである。

理論的に吟味し解明すべきことはまだ多く、軽はずみな予測は慎むべきであろうが、私は（１）言説空間内の発話のポジションにおける差異のシステム（２）既存の言説のコンテキスト——間テキスト性の網状組織——と（３）プラグマティックな真理化のプロセスのそれぞれは、相対的に自律的でありうると予想している。ジジエクがイデオロギーに関して好んで取り上げる一つの当惑させる特徴、「人びとが実際にやっていることと、彼らが自分たちがやっていると思いついでいることとの、不一致の問題」[ジジエク 2000: 50]、人はしばしば自分が信奉している信条とは相容れない観念に基づいた行為をなすという事実、意見としてもたれている観念と行為や状況の中にならば「埋め込まれている」観念との不整合などは、単なる「自己欺瞞」や虚偽意識といったものではなく、それぞれのシステムの相対的自律性によって説明できるだろう。またこうした相対的自律性のなかに、社会におけるオカルト的な言説、ファンタジーやフィクションの流通の意味を解明する手がかりがあるかもしれない。

この最後の予想も含め、ここでのべた見取り図は、現段階では荒っぽい素描の域を出ていない。しかし少なくとも新しい研究実践を方向付けるには十分であろう。とりあえずこうした素描にたつて、具体的な言説の分析にとりかかること（さしあたっては特定の社会空間で真なるものとして流通している観念とその変異体の分析）、このこと自体がもたらす結果がこの荒っぽい見取り図を修正・精緻化してくれるだろう。ここでも私はプラグマティズムの真理化のプロセスに自分自身の理論的見通しの今後の展開をゆだねたいと思う。

参考文献

デイヴィドソン、ドナルド

1991 『真理と解釈』野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要共訳、勁草書房。

デネット、ダニエル・C

2001 『ダーウィンの危険な思想：生命の意味と進化』山口泰司監訳、青土社。

イーグルトン、テリー

1999(1991) 『イデオロギーとは何か』大橋洋一訳、平凡社 (Eagleton, T., *Ideology: an introduction*, London, New York: Verso).

ジェイムズ、W.

2004 『プラグマティズム』柘田啓三郎訳、岩波書店。

片桐 薫編

2001 『グラムシ・セレクション』平凡社。

Leiter, K. C.

1980 *Primer on ethnomethodology*, Oxford: Oxford University Press.

Neisser, U.

1976 *Cognition and Reality*, San Francisco: Freeman.

Taussig, M.

1980 *The devil and commodity fetishism in South America*, Chapel Hill:

University of North Carolina Press.

戸田山 和久

2002 『知識の哲学』 産業図書。

ジジェク、スラヴォイ

2000 『イデオロギーの崇高な対象』 鈴木晶訳、河出書房新社。

(2007年2月7日 採択決定)